

自己愛的同一化と死のイメージについて —安部公房『無関係な死』を素材として—

松 岡 努*

On Narcissistic Identification and the Image of Death —A Study of Kobo Abe's "The Unrelated Death"—

Tsutom MATSUOKA*

1. はじめに

臨床心理学の領域では、同一化という用語はよく使われる言葉の一つであるが、その用語が意味しているところは幅広く、学派や使われている文脈によっても異なる。本論文ではまず同一化の用語の整理からはじめ、早期の同一化が必然的に自己愛的であることを示したい。自己愛的同一化が働いているとき、本質的な自己は否定され、疎外される。自己愛的同一化によって疎外された自己がどのように回帰してくるのか、安部公房の小説『無関係な死』を題材として取り上げて検討する。否定され、疎外された自己は自己の一部としては否認されるが、自己の世界の一部にその痕跡が残りに続けている。それはしばしば死のイメージを帯びている。疎外されて死のイメージを帯びた自己について、Lacanの対象aという概念を援用し、その意義について検討する。

2. 同一化の概念について

心理学において同一化(同一視)という用語は対象と同一になること、すなわち、対象が考え、感じ、行為するのと同じように自分も考え、

感じ、行為することを指す、精神分析由来の言葉である。

外側にあるものを自分の内側に持ちこむという心理的操作は自他の区別が不分明である発達初期からはじまり、自他の区別が確立された上で取り入れられるようになるまで、さまざまな形態が考えられる。そのため、前者を一次的同一化(Freud 1917/1970)と呼び、それと対比する形で後者を二次的同一化と呼ぶことで両者の差異を明確にしようとしたり、同一化以前の自我境界のあいまいな程度に応じて、のみこみ(体内化)、取り入れという用語を別立てにして、のみこみ・取り入れ・同一化の三つを包括して内在化という用語で取りまとめるなどといった概念上の工夫がなされてきた。

同一化を一次のおよび二次的という二種に分けた場合、一次的同一化は発達的により早期の段階における自他未分化な状態での同一化であり、「直接の、介在なしの同一化で、どの対象カセクシスよりも早期のものである」(Freud 1923/1970)とされる。Freudが一次的同一化という概念を最初に持ち出したのは、対象喪失に際して正常な悲哀のプロセスと病的なメラン

*人文学部 人間関係学科

コリー（精神病性うつ病）のプロセスの違いを説明するためであったが（1917/1970）、メランコリーの場合、対象に向けられていたりリビドーが退行し自我に取り入れられた対象に自己愛的に同一化するとされている。Freudの記述を引用しよう。「対象への愛は棄てきれないで対象だけが棄てられるのだが、この対象愛が自己愛的な同一視に逃げて対象が自我にとりいれられると、あらわにこの代理の対象にたいし憎しみがはたらき、それを侮辱し、軽蔑し、苦しめ、この苦悩にたいしてサディズム的な満足を与える。」ここで「自己愛的な同一視」と訳されている箇所、すなわち自己愛的同一化という表現によって、Freudは一次的同一化が自己愛的な性質を持っていると述べている。一次的同一化の場合、外的な対象に向けられたリビドーは内部の対象に向けられている。そのため、一次的同一化はその本質からして必然的に自己愛的だということになる。

他方、のみこみ・取り入れ・同一化の三つを内在化の種々相とみなした場合、自他が未分化な状態から分化した状態へと進んでいく漸次的な発達ラインが考えられる。最早期の段階であるのみこみは、自己と他者との境界がはっきりしていない。口唇的活動によって対象と一体化するが、その際対象を破壊するファンタジーを含む。万能的な破壊のファンタジーが緩和されて対象が破壊されることなく保持されるようになるにつれて、内在化は取り入れと呼ばれる形態となる。親の養育機能や禁止が取り入れられ超自我と呼ばれる心的構造の一部になっていくが、それは自我にとって内的に異質なものであり、十分に統合することができないものである。自我がそれに圧倒されるのであれば個としてのアイデンティティを失うような状況もありうる。自己と対象との分化がさらに進むと狭義の同一化という形態になり、より選択的に他者の態度、

機能、価値などが内在化され、それらは自己の一部として他の自己部分に統合されて自己のアイデンティティを支えるものとして働くようになると考えられる。

このように、一口に同一化といっても理論の枠組みによって相当に幅のある概念である。さらに理解を複雑にしているのが同一化と投影（投射）との関係である。外側のものを内側に持ち込むという内在化のベクトルを外に向けたかえたものが外在化であり、その心的機制は投影という用語に集約される。投影とは自分の中にあって自分のものとして受け入れがたい衝動や願望、感情、態度などを、他者や外側の世界に属するものとして認識する防衛操作である。Klein（1946/1985）は、投影と同一化を組み合わせることで投影同一化と呼ばれる原始的で幻想的な心的操作について概念化した。乳児は自己の悪い側面を母親の中に排出・投影し（単に表面に「投影」するだけでなく）、そうすることで母親を害しあるいは内側から支配し、母親はその悪い側面と同一化される。投影され同一化されるのは、悪い攻撃的な側面だけでなく、良い愛情的な側面もまた投げ込まれるとされる。いずれも投影され同一化されることで、乳児の内側は枯渇を体験すると Klein は述べている。

3. Kleinの投影同一化の概念について

1955年の論文『同一視について』で Klein は投影同一化の概念を発展的に論じている（1946/1985）。幼児は母親の身体に対して攻撃的な空想を抱くが、内なる破壊衝動は破滅への恐怖を引き起こし、それに対する防衛として内的な対象を分裂させる。しかし、自我の統合能力が進むにつれて対象に対する愛と憎しみの葛藤を抱え、空想の中で生じた破壊に対する罪と悲嘆を体験するようになっていく。ほどよい発達においては、良い対象を内側に取り入れられ

ることで、自我に富と豊かさの感情が生じ、情緒的に枯渇することなく外側の対象に自己の良い部分を投影することができる。そのような望ましい循環によって、自我の統合はさらに促され、自我は豊かになり、対象を愛し対象に愛されているということや生きていることという感覚を育んでいくことになる。しかし、貪欲さや羨望があまりに強くて分裂が強化され続けると、悪い対象を取り入れ、自己の悪い部分を分裂させて外側に投影することになる。それは内なる破壊衝動による破滅への恐怖への防衛としての機能を持つが、そうすることによって混沌や解体の感情、そして情緒の欠乏感を引き起こし、自我を弱体化してしまうのである。

Klein は同じ論文 (1955/1985) において、フランスの小説家ジュリアン・グリーンの『私があるなら』(1947/1970) をテキストとして、自己の分裂と投影同一化によって自分から逃れて他人から他人へ渡り歩く登場人物の分析を行っている。主人公のファビアンは自分の容貌、女性関係、経済状況、仕事などに不満を抱き、富と成功を手にした人物への強い羨望と憎悪に駆り立てられている。そこに悪魔がつけこみ、ファビアンは悪魔と契約と取り交わして他人に変身できる呪文を手に入れる。呪文によって彼は次々と他人になり代わっていくが、いざ他人になってみるとさまざまな不都合があることに気づき、満足することはできない。しかも、人から人へと移っていくうちに、彼は自分が誰だったのか忘れかけてしまう。他人になり代わっている間、彼の肉体は自分の下宿で気を失って眠り続けている。物語の終盤で、かろうじて自分の名前を思い出すことができたファビアンは眠り続けている自分の肉体にたどり着き、自分自身に戻ることができる。

Klein の解釈によれば、ファビアンは持って生まれた性格もさることながら、愛情と思いや

りに欠ける母親との関係において、貪欲、羨望、恨みを強めていた。そのような悪い自己は分裂されて、浪費家で女性関係に放縦だった父親(すでに亡くなっている)に投影される。彼を吸い尽くそうとする悪魔=悪い父親と契約を取り交わし、飽くなき欲望を抱えた悪い父親の部分(それは彼自身の悪い自己でもある)を取り入れる一方で、外部の人物に投影された形で父親が占有しているはずの良いものを羨み、貪欲に欲しがることになる。彼はみすぼらしい自分自身を捨ててそこから逃げ出そうとする。しかし、良いものを持っているはずの他人に同一化しても良いものを手に入れることはできず、次々に他人になり代わり同一化を繰り返していく。そうすることによって、ますます自分を失っていくことになるのである。

しかし、その一方でファビアンは自己の良い部分を表す人物とも出会い、惹きつけられていく。それは愛情能力を持つ彼自身の良い人格部分である。それがきっかけになり、今度は下宿に残された彼の肉体が彼の良い部分として少しずつではあるが統合が進んでいる面もある。統合に向かうこの面での進展によって、最終的にファビアンは自分自身の身体に戻ることができるのだと Klein は述べている。

物語の序盤、悪魔によって呪文を授けられたファビアンは、翌朝目覚めて部屋の中を眺めて思う。「見るさえ堪えがたいのは、すべてにまして、椅子に打ち棄てた彼の衣類だった。それはちょっと名状しがたい仕方、彼にそっくりだった。むしろ、虐殺されたか、雷に折れ曲がりでもした彼の姿だった。とりわけ、ぽっかりと口の開いた袖口が、まるで生命を失った腕のように、何かしら悲愴なものをたたえて垂れ下がっていた。」(p.62)ここに描かれているように、彼はそこに悪い自己を投影し、続く話の展開においては、自分の肉体に悪い自己を託して下宿

に置き去りにしていく。それは不吉な死を象徴しているように思われ、実際彼はより良い生命をもたらすはずの肉体を求めて同一化していく。つまり、ファビアンは悪いもの（それは死体のように描かれている）を自己の中で分裂させて後に残し、その一方で豊かな生命をもたらす良いものを他者の中に次々と追い求めていくのである。その結果さらなる不満や情緒的な枯渇があえぐようになるのは皮肉というほかない。

小説の結末は旧版と新版では若干異なる（新版において若干の付け足しがある）が、旧版では物語の最後、置き去りにした肉体と統合したファビアンは母親のそばで深い幸せを感じながら息を引き取ることになっている。この結末について、Klein は次のような考察を述べている。自分の死に対して、それがあまりに強烈な恐怖をかきたるためにファビアンはそれを否認していたが、自分の中に良い対象を取り込んだ良い自己を発見し、愛情能力を取り戻すことによって自分の死を受け入れることができるようになる。そして、死がさし迫っているという感覚によって、置き去りにされていた自己の部分と統合するように促されているのであると。1970年にグリーン自身によって加筆された新版の結末では、これらがすべて夢のことだと暗示されるが、いずれにせよ、自分の死を巡って、自己を分裂させて同一化によって己の死から遠ざかろうと企てながら、最終的に死も含んだ自分自身、そして自分の人生に戻ってくるのがこの物語の中心を貫くテーマだと言える。

Klein が考察しているように、貪欲や羨望、憎しみという内的な破壊衝動による壊滅的な破壊を恐れ、その防衛として自己を分裂させて悪い対象関係を投影し、同一化することによって自己の分裂は維持され続ける。そのため、悪い対象関係は否認され先送りにされつつも、死に近縁の解体や混沌、そして情緒的な枯渇や不毛

感などにまといつかれることになる。Klein はこれら一連の分裂に向かう働きを Freud (1920/1970) の言うところの死の本能の表れとみなした。そして内在化された良い対象を焦点として統合に向かう働きを生の本能的表れとして、これら二つの対象関係の相克として、子どもの内的発達を描き出したのである。

貪欲な悪い自己を対象に投影同一化するということは、理想化され追いつめ続けている対象を自分の貪欲さによって蝕み破壊してしまうことである。そのために次々と同一化の対象を変えていかねばならないという自転車操業のような状況が、グリーンの小説には巧みに描かれている。同一化の連鎖のもとをたどれば、下宿に置き去りにされた自分がある。その自分はさえない容貌を持ち、女性関係をうまく持たず、経済的に恵まれず、仕事にも不満を抱え、さらには死を予感に怯えている悪い要素を託された自分である。ファビアンが愛情能力を取り戻して、自己の統合へ向かうことではじめて置き去りにされた自分を取り戻そうという動きが生じる。

理想化された対象に同一化する過程において、脱価値化された自己が置き去りにされることは論理的に必然だとも言える。しかしその理想化はあくまで自己が幻想的に思い描いた空想的なものでしかなく、その意味では自分の万能的な空想世界の中のことであり、言い方を変えれば自己愛的である。つまり、自己愛的な同一化というものは、同一化していく動きの後に、自己の一部としては否認された側面を置き去りにしていくのである。

自己愛的同一化によって置き去りにされる自己との関わりについて、ここで安部公房の小説『無関係な死』を題材として取り上げてみよう。置き去りにされた自己が死体という形で自分の前に現れ、その処置を巡って泥沼にはまってい

まずは作品のあらすじを提示し、次いでその死体が主人公にとってどのような意味を持ちうるのかを検討する。

4. 作品のあらすじ

『無関係な死』は昭和36年(1961年)に「群像」に発表された安部公房の短編である(1961/1998)。「客が来ていた。そろえた両足をドアのほうに向けて、うつぶせに横たわっていた。死んでいた。」とたたみかけるような書き出しで、いきなり安部公房らしい不条理の世界が開かれる。次いで、驚愕した主人公Aの生理的・心理的な反応が克明に描かれていく。Aは死体を前にして、その死体に対してなんらやましいところがあるわけではなかったが、無意識のうちに目撃者の存在をうかがい、誰もいないことを確認してドアを閉め、掛け金まで閉めたところから、閉塞的に話が展開しはじめる。

鍵を閉めたことでAはハッと気がつく。部屋に入るときに確かに鍵を開けた記憶がある。だとするなら死体は誰かに殺され、Aの部屋に置き去りにされた可能性が高い。そこには何らかの悪意、言うなれば彼を陥れる計画があるのかもしれないのだ。Aは死体をよく観察する。見覚えのない男であることは確かだった。外傷はないようだが、ねじれたような上半身は、死体が外部から持ち込まれたことを意味しているようだった。

Aは混乱した頭で、この難しい状況について考えを巡らせる。この状況から逃れ出るためには、外部の世界に助けを求めればいはずである。しかしそのためには、死体の死に彼が無関係であることを証明せねばならない。いくら彼が無関係を主張したところで、その証拠を示せないことには、状況からして彼が疑われる危険があるのだ。Aはいたずらに逡巡する。

しかしいつまでもこのまま放置するわけには

いかない。いずれ死体はにおい出して隠しようがなくなるはずである。暗くなれば明かりをつけねばならない。その明かりを誰かが見れば、そこにAがいたことが隠しようのないこととなる。あるいはすでに彼の帰宅は、アパートの誰かに気づかれているのかもしれない。彼がここにいたことは明らかであり、そこに死体がある以上、その犯人にされる可能性も高い。

そうだとすれば、死体をどこか別の場所に始末するほかない。あるいは犯人も死体の始末に困ってこの部屋に放り込んだに過ぎないのかもしれないとAは思う。鍵にしても、どんな鍵を使っても開いてしまうような頼りのない鍵なのだから、勝手に開けたとしてもさほどの困難はなかったはずである。何も自分が陥れられたわけではなく、たまたま偶然死体を押しつけられただけなのかもしれない。それならば死体をさらに別の場所に移せばいいのだ。そうすれば、死体をどうするかという問題は、死体と一緒にその人物に託され、Aはこの困難から逃れることができるはずだ。Aは死体をアパートの他の部屋に運ぶための計画を立てる。死体を移せる留守の部屋を確かめるために、Aは暗くなるのを待つ。十分に暗くなれば在宅者は明かりをつけるだろう。部屋が暗ければ留守のはずである。

そう思ってタバコをくわえてマッチが見つからず探しているうちにハタと気がつく。犯人は物的証拠として死体のポケットにAの使いかけのマッチを入れたということもありうる。それはマッチに限らない。部屋の中にある何かを死体に隠し持たせたのであれば、それはAとのつながりを証し立てる証拠になってしまう。どうしてもそれを探し出さねばならない。しかしすでにあたりは暗くなっている。明かりをつけずに探し出すのは不可能になっていた。

仕方なく明かりをつけて、Aは死体をくま

なく調べはじめる。すると、死体がうつぶせになっていた場所に、死体から出たらしい小さな血のあとが残っていることに気づいてしまう。Aは血痕を消そうとしていろいろ試すが、石鹸で拭いたせいで周囲の色まで落ちてしまった。消し去った痕跡は死体隠滅のための隠しようのない証拠になりうる。Aは白くなった癍痕を消すために、今度は周辺を、そして全体を洗いはじめる。床全体が白々と洗い上げられたころ、これほどの苦勞をかけて血痕を消す必要があったのだろうかと思う。血痕を調べれば、死体が運び込まれた時間が割り出せるかもしれない。そうすれば、その時間に彼は仕事で家にはいなかったことを証明する物的証拠になるかもしれないのだ。そう気づいたものすでに洗い上げられた床を見てAは愕然とする。いさぎよく自首する道を選ぶか、あくまで死体と格闘を続けるか……。しかしどちらを選ぶにしてもAはすでに疲れ果てている。

以上が作品のあらすじである。なぜ死体がそこにあるのか、主人公のAだけでなく、読者にも最後まで明かされることはない。問答無用とばかりに死体はそこにあるのだ。作品の中で死体はあくまで具象的な死体であり、それは細部にいたるまでリアルに描かれている。作者が描こうとした主題は、死体がそこに置かれた経緯にあるのではなく（まして推理小説のような犯人探しではなく）、日常生活に見ず知らずの死体が突然転がり込んできたという不条理な設定において、その死体とどう取り組むのかという点にありそうである。そうだとするならば、Aが格闘し続けている死体には、象徴的な意味もまたそこに託されているはずである。むしろ、そのような勝手な読みは、作者の意図とはかけ離れたものであるかもしれない。しかし、ここではあくまで自己愛的同一化とそこから排除されたものとの関係を考える上での素材とし

て考察してみたい。

5. 死体に象徴されるもの

この作品で著者は、突然日常に乱入してきた見ず知らずの死体からいかに逃げるかという主人公Aの心の動きを緻密に描き出そうとしているように思われる。A自身は自分の部屋に死体があることについてまったく身に覚えがないにも関わらず、無実を証明できないことを恐れてドアを閉めて鍵をかける。その時点から、Aは外界から隔てられ、内的世界の内側で、ひたすらに死体と向き合うことになる。このような話の設定や展開の仕方から、Aは意識的には自分が死体と無関係であり、その死に対して無実であると思っけていても、無意識的には死体に対してある種の後ろめたさを感じているとみることができよう。Aが死体にとらわれていくのは、無意識的には必然性がありそうに思われる。

この無意識的の罪悪感が何に由来するのかということについては、いくつかの解釈が成り立ちうる。個人を押しつぶす社会システムに対する不信感や不安感という、個人対社会という図式からそれを説明することもできなくはないが、作品は閉ざされた部屋という象徴的表現によって個人の内的な葛藤を描いているのであるから、やはりAの内的な体験から考えていくべきであろう。

Aの内的葛藤から理解するにしても、いくつかの解釈の可能性があるだろう。例えば、無意識的な攻撃性に基づく殺意に対して、内的な超自我による断罪が葛藤を形成し、前者の部分がすっぽりと抑圧されているとしたらどうであろうか。無意識に攻撃がなされた結果としての死体だけがそこに残されている（それは小説としての象徴的な表現であるとみる）。そして、自分がその下手人であるという自覚はないまま、

無意識的な非難は外部に投影されて、犯人として訴追されるという不安を引き起こしているということになりそうである。

誰に向けられた攻撃性なのかという点については、その手がかりはまったくない。死体が赤の他人であることは何度も言明されているが、これも攻撃性の対象をあいまいにするための置き換えとみることもできる。手がかりがないまま考える解釈としては——そしてそれはもっとも凡庸な解釈でもあるが——ここにエディプス・コンプレックスをあてはめるというものであろう。死体の男を父親と見るのであれば、同性である父親に対するライバル心から、父親を亡き者にして父親の地位に自分がつくという解釈である。作品中では死体の男の年齢も示されず（Aの年齢も記されてはいないが、独身の勤め人であることからある程度絞ることはできよう）、死体の顔に父親の面影を見出しているわけではない。むしろ、赤の他人であることが強調されている。それゆえ、死体の男を父親とみなすのは無理があると言えるかもしれない。しかしそれはまた同時に、それだけ強く抑圧されているのだという言い方もできる。これはいわゆる無意識の理論の反証不可能性という問題であり、それを根拠に何かを言うことは困難だし不毛でもあろう。

いずれにせよ、可能性としてAが感じている無意識罪悪感が父親に対するエディプス的な敵意という見方は仮説としてはありうる。安部公房の作品において、エディプス・コンプレックスはまるで無縁というわけでもない。例えば、1984年の長編『方舟さくら丸』（1984/2000）をみてみよう。この作品の主人公「もぐら」は採石場跡の洞穴で社会から引きこもって生活している。もぐらの父親は貪欲な乱暴者で、もぐらの母親は強姦されて子をなしたという経緯があ

る。釣り宿を営んでいた父親は妻を踏み殺したという噂がたって従業員に逃げられてから、もぐらと母親を釣り宿に引き取った。十二歳のもぐらは（父親と同じく）強姦の嫌疑をかけられて（相手は三十歳年上の女性で、もぐらはその現場に居合わせたことで疑われた）、父親に採石場跡に閉じ込められた。それを逃がしてくれたのが母親だった。それ以降、もぐらは父親に対する憎しみを抱えている。これは明らかにエディプス状況である。『無関係な死』においてはこれほど明示されていないにせよ、父と息子の葛藤が背景にあると考えられなくもない。

しかし、そのような面があったとしても、それがこの作品の主要なテーマとは考えにくい面もある。エディプス・コンプレックスは三者関係における葛藤であるにもかかわらず、作品中では母親にあたる人物がない。終わりに近づいたとき、外から聞こえてきたハイヒールの踵の音に対して、自分を訪ねる女性（おそらくいつもなら週末に来る付き合いのある女性なのだろう）から死体を隠そうと慌てふためくシーンが描かれているが、これはエディプス的な母親というよりは、もっと外部の存在である。

そうだとするなら、Aは二者関係の葛藤を抱え、その攻撃性とそれによってもたらされた結果にうろたえているのだろうか？ 二者関係、つまり母親との依存と自立をめぐる葛藤という可能性もなくはないだろうが、Aと死体の間には愛憎がもつれあったような情緒の関係がまるで描かれていないのがこの作品においては特徴的である。そこに作者の狙いがあるとはやはり思いにくい。

むしろ、Aと死体との葛藤は、二者関係よりももっと手前にあって、根源的なテーマであるところの一者関係、つまりAの存在の根拠を巡ってなされているという見方が方がしっくりくるだろう。そもそも安部公房という作家は、

芥川賞受賞作の『壁』（1951/1997）がそうであるように、普通の人間が漫然とその上に胡坐をかいて疑うことのない自分について疑問を抱き、自己の存在の不確かさにおのきよめく人間と、そのような人間が他の人間とつながることの困難を象徴的に描くことを得意とした作家である。そうであるならば、この作品で描かれている A と死体との間で繰り返される葛藤は、A という一人の人間の存在を巡る葛藤であり、そこから生じる無意識的な罪悪感だと考えることができる。つまり、死体は A のある側面を示している、A の失われた一部だと考えることができそうである。実際、死体はスーツを着た男性であり、父親や母親のイメージよりよほど A 自身に近い人物として描かれている。では、A と死体はどのような関係（無関係だと作品中では言われているが）が考えられるのだろうか。

6. Lacan の対象 a の概念について

そもそも心理的な成長や変化というものには、それまでの自分と異なる自分への移行がある。新たな自分とかつての自分との間にはある程度のつながりも保たれているはずだが（そうでなければ、自己の連続性というものが断たれてしまい、自己の歴史性を失ってしまう）、古い自分を脱ぎ捨てて、別の自分になっていくという差異を飛躍していく動きがある。新たな自分になっていくとき、かつての自分は蟬の抜け殻のように後ろへ置き去られていくのである。

このような自己の跳躍を Lacan は鏡像段階の理論として描き出している（1966/1972）。生まれて間もない乳児は自分と自分の身体との関係との不調和に苦しんでいる。自分の意志と身体を協応させることも困難であり、言語的に他者とコミュニケーションを図ることもできない。そのような乳児も生後半年を過ぎて鏡に映った

自分の姿が自分であると認識できるようになると、それによって自己の全体的なイメージを先取的に手に入れる。バラバラで不統一であった自己体験は、鏡像として得られた自己の視覚的イメージという形態的なゲシュタルトに同一化することによって、仮の統合が図られる。ここで「仮の」と言っているのは、バラバラの自己体験は内的発展の末に統合されたわけではなく、外的なイメージによって幻像として（想像のレベルで）かりそめのまとまりを見出したに過ぎないということを意味している。実のところ未統合でバラバラな自己体験はなくなったわけではなく、鏡像として示された自己イメージが歪んだり揺らいだりするならば、かつての不調和な状態にすべり落ちてしまうかもしれないようなものである。そうならないように、人は鏡像として示された自己イメージを熱心に欲するわけであるが、それは泉に映った自分の姿に恋をするナルキッソスそのものであり、鏡像に自己愛的に同一化していると言える。

また、この鏡像への自己愛的な同一化には、必然的に自己疎外をとまなう。自己の不確かさに悩む主体にとって、鏡像は統合と安定をもたらす魅力的を持っている。そのような幻像に同一化する一方で、ばらばらで未統合な自分は自分でないものとして排除されるのである。鏡像はやがて自分を映し返す他者の存在の内側に見出されるようになるが、そのとき人は他人の心の中に映っているだろう魅力的な自分に自己愛的に同一化してゆき、不確かで未統合な自己を脱ぎ捨てていくのである。しかし、魅力的な統一体としての自分になったと思ったところでそれはあくまで幻想的にそうなのであって、脱ぎ捨てられたはずの自分はどこかに残り続ける。こうして人間は自己愛的な鏡像的イメージ（借り物の自己）と、そこから疎外された未統合な自己（自己の本質）という二つの極を揺れ動い

ていることになる。そして、未統合な自分こそ根源的な自己であり、自己の本質であるとしても、苦悩や不安をもたらす未統合な状態に滑り落ちることを恐れてそこから逃れようと企て、より出来の良い、見栄えの良い借り物の自分に自分を同一化してゆくことになるのである。

こうした状況は、Klein (1955/1985) が取り上げたグリーンの小説の主人公がまさにそれにあたる。みすぼらしい本来の自分に不満を抱いた主人公ファビアンは、良いものを持っているはずの他人（それは父親が投影されている）に同一化を図り、それでも満足できずに次々と同一化の対象を変えていくうちに、ますます自分を見失っていく。本来の自分は死んだように眠り込んでいる自分の肉体として、後ろに打ち棄てられているのである。Klein はこの作品を分析することを通して、内的な世界が良い面も悪い面も非常に生々しく投影されて、それに同一化していく様相を示している。

翻って安部の作品では、Klein が描くような情緒がもつれあう投影の部分はまったく削ぎ落とされていると言ってよい。主人公 A と死体はまったくの無関係であり、そこには情緒的な思いはまるで存在しない。むしろそのことによって浮き上がってくるのが、そのような生きた情緒を欠いた「死体」であるということである。そのようなものが A の日常に投げ込まれてくるのである。それはいったい何であるのか。ここで主体が自らを投げ出し（主体の死）、無となることによって言語という象徴的な次元において可能性として存在するという跳躍について考えてみたい。

新宮 (1989) は、Lacan の理論を援用しながら、言語の次元に参入するために消失してしまう存在の主体は、死体のイメージとなって言語的なものに接合しているのだと述べている。これは少々難解な言説ではあるが、ごく簡単に言

えば次のようになろう。人間の世界における意味というものは、とりわけ言語的な意味の世界は、ものそれ自体の現実的な実質を切り捨てることによって（そのものとしては無となることによって）象徴された次元の平面に開けてくる。切り捨てられたものの本質（自分自身の本質もまたそこに含まれる）は、すでに失われてなくなっているにせよ、ないものとして刻印づけられて象徴的な世界のどこかに置いておかれる。新宮は、言語活動という象徴的な次元に入るといことは、消去され疎外された主体の本質は死をイメージさせるもの、あるいは死体として無意識の中に漂っているという。それは内的な死の知であると同時に、言語の次元における生命活動への移行を意味している。そして、内なる死によって、言語的な次元における生命的なものを生み出そうと駆り立てられているのである。

こうした考えを安部の作品に照らして考えてみると、この死体は主人公 A の消された主体の痕跡とみなすことができよう。Lacan の用語で言えば対象 a にあたる (1964/2000)。対象 a とは、主体がその本質を消し去られて象徴的な次元において成立すると同時に、そこからこぼれ落ちて消し去られた欠如を埋めるために登場しつつもその本質には触れることはできないようなものである。対象 a は、自分を消し去ることによって他者の欲望の対象となり、それによって自己の存在の根拠ともなるものである。それはまた、禁じられた享樂の対象（鏡像段階の理論では、鏡像に映し出された主体を喪失する以前の自分自身であり、それを与え実現してくれる対象でもある）の痕跡でもある。享樂はそれが禁じられ、実際には享受できないことによって逆にその存在を可能性として措定しうる。その印となるのもまた対象 a である。それはいわば生命の抜けた抜け殻、あるいは断片化され

た寸断した身体のようなものである一方で、その姿が確かには見られないがゆえに理想化され、例えようもない美しさや完全さを持つものにもなりうる。

このように対象 a という概念はかなり多義的で、幅の広い意味を担っているために、それを明確に定義づけることは困難であり、とりわけ、原始的に理想化されれば脱価値化もされる点においてわかりにくさをはらんでいる。理想化された姿で現れてくるならば、自己愛的に同一化したくなるような魅力を持った対象ということになる。また、グリーンの小説の主人公ファビアンがそうであったように、悪い父親もその幻想的な力によって同一化の対象になりうる。これらは良いか悪いかのベクトルの違いがあるものの、プラスマイナスのいずれかの価値を帯びた対象である。

しかし、安部の作品に出てくる主人公 A にとっての死体は、いずれの価値においても同一化の対象にはなりがたい。この場合、自己愛的同一化の対象とは質的な違いがあると言えよう。むしろ、もっとも同一化したくないような対象である。しかし、A の日常を脅かすような形で A の生活に投げ込まれてくるのである。このような性質を担った対象 a としての死体はどのような意味を持ちうるのだろうか。A にとって情緒的な投影の対象としてではなく、見ず知らずの死体が投げ込まれているという理解しがたい不条理として登場してきているということは、A の自我から見れば自己愛的同一化に割って入るような衝撃を与えるものである。このことは、A の全体的な心理的布置として、何らかの意味のあることなのではないだろうか。

ここで、Lacan (1964/2000) も取り上げている絵について考えてみよう。ハンス・ホルバインの『使節たち』(1533年) という絵である。雑多な物が置かれた棚の手前に二人の人物(騎

士と司祭)が、それぞれいかめしい服装に身を包んで突っ立っている。二人の間から見えている棚の上に置かれたものは、当時流行の諸科学や諸技芸に関するものであり、虚栄を意味する。二人の足元に斜めに白っぽいものがあるが、正面からは何であるのかよくわからない。しかし、左斜め下から見たとき、それが髑髏であることがわかるというだまし絵になっているのである。

ごく普通の日常というものは、この絵のようなものなのかもしれない。表面に見えるところで着飾り、知識や技能を身につけて自分を有能な人間に仕立て上げる。それはグリーン的主人公が度重なる投影同一化によって追い求めたものであり、自己愛的な同一化によって求められるのは人に誇れるような理想的で完全な自分になるということである。しかし、それは虚栄だったり虚勢だったり、いずれの言葉にも「虚」という言葉が入っているように、中身のない空虚なもの、有限であり無であるものでもある。通常、それを当事者は知らないし、知ろうともしない。ホルバインの絵でも、登場する二人の人物は自分の足元に転がっている髑髏とは無関係に存在している。髑髏は二人の人物の存在の根拠であり、それがすでに失われて空虚であることを示しているようである。実際、神も死んだ現代では、自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのかという自分の存在の真理は失われている。それが失われていることさえ無意識なものとなり、消し去られた痕跡としての髑髏がひそやかな形で絵に入り込んでいるのである。

しかし、安部の作品では、死体はそのようなひそやかな形ではなく、衝撃的な形で投げ込まれている。いくら主人公が無関係を主張したところで、死体を無視することはできない。そしてはや死体を隠滅する道もないまま死体と格闘を続けねばならない状況で小説は終わっている。それは愚の骨頂であるようであり、何かし

らかの真実味もともなう。これは主人公 A が、死体に象徴された空無に否応なしに気がつき、存在の根拠を消し去ったのは自分であると非難されることを倫理的に恐れながら、それでも消え去ってしまった自己の存在の本質を知ろうと黙して語らない死体に向き合い、真実を教えてくださいと声なき声を聞こうとする真摯な姿だと言えなくもない。

とりわけ、新宮 (1989) が「言語の中に挿入された主体は、このような死体のイメージとなって、文字のイメージとなった言語に接合しているのである」と述べていることを敷衍するならば、主人公 A は文字を書くことによって真実に接近しようと試みる小説家としての安部公房自身でもあるのかもしれない。

7. おわりに

自己愛的同一化が働いているとき、根源的で本質的な自己は否定され、疎外される。それは鏡像段階で統合されたはずの寸断された身体であり、何も語ることでできない言語の次元に参入する以前の自己である。疎外された自己はしばしば死のイメージを担う。安部公房の小説『無関係な死』では、見ず知らずの死体が日常に投げ込まれ、主人公はそれと向き合わざるをえなくなる。自己愛的同一化に楔を打ち込む動きをするこの死体。それは Lacan のいうところの対象 a であり、対象 a と取り組み、沈黙した死体に耳を傾けることが自己の本質に向き合うことでもある。

参考文献

- 安部公房 (1951) : 壁 S・カルマ氏の犯罪『安部公房全集 2 [1948.6-1951.5]』1997 新潮社 pp.378-451
- 安部公房 (1961) : 無関係な死『安部公房全集 15 [1961.1-1962.3]』1998 新潮社 pp.160-

179

- 安部公房 (1984) : 方舟さくら丸『安部公房全集 27 [1980.1-1984.11]』2000 新潮社 pp.247-469
- Freud, S. (1917) : Mourning and Melancholia. Standard Edition X VI 井村恒郎 小此木啓吾 (訳) 1970 : 悲哀とメランコリー『フロイト著作集第 6 巻自我論・不安本能論』人文書院 pp.137-149
- Freud, S. (1920) : Beyond the Pleasure Principle. Standard Edition X VIII 井村恒郎 小此木啓吾 (訳) 1970 : 快感原則の彼岸『フロイト著作集第 6 巻自我論・不安本能論』人文書院 pp.150-194
- Freud, S. (1923) : The Ego and the Id. Standard Edition X IX 井村恒郎 小此木啓吾 (訳) 1970 : 自我とエス『フロイト著作集第 6 巻自我論・不安本能論』人文書院 pp.263-299
- Green, J. (1947) : Si j' étai s vous... 原田武 (訳) 1970 : 私があなたなら 青山社
- Klein, M. (1946) : Notes on some schizoid mechanisms. The Writings of Melanie Klein, Vol. 3. Hogarth Press, London. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男 (訳) 1985 : 分裂的機制についての覚書. メラニー・クライン著作集 4 誠信書房
- Klein, M. (1955) : On Identification. The Writings of Melanie Klein, Vol. 3. Hogarth Press, London. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男 (訳) 1985 : 同一視について. メラニー・クライン著作集 4 誠信書房
- Lacan, J. (1964) : Le Séminaire de Jacques Lacan Livre X I Les quatre cocepts fondamentaux de la psychanalyse. Éditions du Seuil. 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭 (訳) 2000 : ジャック・ラカン

精神分析の四基本概念. 岩波書店

Lacan, J. (1966) : Écrits. Éditions du Seuil. 宮

本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次 (訳)

1972 : <わたし>の機能を形成するものとし

ての鏡像段階—精神分析の経験がわれわれに

示すもの—. エクリ I 弘文堂

新宮一成 (1989) : 無意識の病理学—クライン

とラカン— 金剛出版